

＝ 社会科教育研究の動向 ＝

社会科教育研究の対象・レベルと研究方法論

—1982年末～1985年の紀要・研究集録の研究動向—

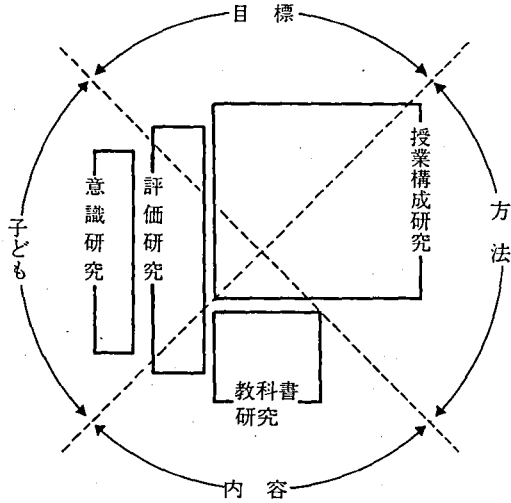
広島大学大学院 木村博一

1. はじめに —対象文献と分類視点—

本稿は、『社会科研究』第31号以降の三年間（1982年末～1985年）に発表された研究論文の中で、主として学会誌、大学の紀要・研究集録に掲載された論文を対象とする。この期間、筆者が調べただけでも約180本の論文が発表されている。本稿の紙数の関係上、約半数しか取り上げられないことを最初にお断わりしておきたい。

本稿では、今日までの社会科教育研究を、広義の意味の授業構成研究（カリキュラム構成、単元構成の研究を含む）、教科書研究、評価研究、意識研究に分類する。これらの研究を社会科教育の目標・内容・方法・子どもの四視点で整理すると、図Iのようになる。授業構成研究は、社会科教育の目標・内容・方法・子どものすべてに関わっているが、中でも目標と方法に（特定の目標を達成するためには、どのように授業構成すればよいか、どのような方法で教えればよいか）重点がおかれている。教科書研究は内容に、評価研究は子どもがどのように内容を習得し、目標を達成したのかに、意識研究は子どもに重点がおかれている。各々の研究は密接に関連しなければならないが、分離されて研究が行われているというのが概ねの現状である。—分類視点〔1〕

さて、社会科教育研究は学校における社会科教育実践の向上・科学化に資することを目的とするものである。研究者は、より優れた社会科教育の理論（理論仮説）を創造し、そこから優れた実践を創造をすることに努めている。そのためには、内外を問わず、過去の優れた社会科教育の理論及び実践が分析され、新たな創造の礎となる必要がある。過去の理論及び実践から学び取るだけでなく、過去の理論及び実践の到達点を明確にするために、分析的研究は行われなければならない。さらには、新たに創造された理論及び



図Ⅰ 社会科教育研究の対象

研究対象のレベル \ 研究方法	分析	創造	実証
実践	1	3	5
理論	2	4	6

図Ⅱ 社会科教育研究の研究対象のレベルと研究方法

実践の有効性を実証していくことも重要な研究課題である。このような考えに立脚するとき、図Ⅱのようなマトリックスが作成されよう。——分類視点〔2〕

本稿では、上記の分類視点〔1〕〔2〕を組み合わせ、社会科教育研究の動向の分析を試みる。具体的な分類視点は、授業構成研究では、授業実践の分析、授業構成理論の分析、授業実践の創造、授業構成理論の創造、授業実践の実証、授業構成理論の実証となり、評価研究では、評価案の分析、評価理論の分析、評価案の創造、評価理論の創造、評価案の実証、評価理論の実証となる。教科書研究、意識研究においても同様である。

Ⅰ. 授業構成研究の動向

1.1 授業実践の分析

この分類に属する研究は、学校における社会科の授業、学習指導計画、カリキュラム

の分析を行ったものである。主なものとしては、①齋藤利彦「わが国における「時事問題学習」の教育方法史的検討」日本教育方法学会『教育方法学研究』第8巻, 1982, ②谷口雅子「大正時代の体験学校」『福岡教育大学紀要』第33号, 第2分冊, 1983, ③祇園全禄「社会認識形成の視点からみた福岡県地理教育史」『社会科研究』第32号, 1984, ④坂井俊樹「戦前における「社会の学習・研究」を課題とする教育実践の検討」『社会科教育研究』No.53, 1985, ⑤木全清博「北海道における初期社会科教育実践(1)(2)」『社会科教育研究』No.50~51, 1983~1984, ⑥同「北海道における戦後社会科教育史」北海道大学教育方法学研究室『教授学の探究』No.2, 1984, ⑦小原友行「高知県における初期社会科教育実践史研究(I)(II)」『高知大学教育学部研究報告』第1部第36~37号, 1984~1985, ⑧木村博一「戦後初期社会科教育実践史研究」『社会科研究』第31号, 1983, ⑨同「問題解決学習における知識の主体的組織」広島史学研究会『史学研究』第164号, 1984, ⑩三宅啓介「戦後初期社会科教育実践史研究」『社会科研究』第32号, ⑪田中武雄・小町康夫「「地域と教育」についての一考察」『金沢大学教育学部教科教育研究』第21号, 1985, ⑫秋本智香子「わが国における国際理解教育の実践に関する研究」『社会科研究』第33号, 1985, ⑬谷口雅子「社会科と体験学習」『福岡教育大学紀要』第32号, 第2分冊, 1982, ⑭小山直樹「社会科授業改造の視点(II)」『鳥取大学教育学部研究報告』第25巻, 教育科学, 1983, ⑮宮本光雄「社会科の授業分析(I)(II)」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第7~8号, 1984~1985, ⑯吉川幸男「社会科学習活動の発達論的基底」『史学研究』第161号, 1983, ⑰吉村政宣「価値論に基づく意志決定能力育成の研究」『社会科研究』第33号, ⑱永井滋郎・松井政明「インドネシア高等学校(SMA)の歴史教育に関する一考察」『広島大学教育学部紀要』第2部第32号, 1984, ⑲金子邦秀「アメリカの高校社会科教育課程」同志社大学教育学会『バイディア』第22号, 1985, ⑳飯田誠「イングランドにおける中等地理教育の実践形態」日本地理教育学会『新地理』31-4, 1984, がある。

①~④は大正~昭和初期の社会的諸教科の実践を対象としたものである。①は鹿児島登佐と金成みき江の時事問題学習の実践を, ②は川崎市の田島体験学校の実践とその影響を, ③は福岡県における地理教育実践の動向を, ④は志垣寛の郷土教育実践を考察している。⑤~⑪は初期社会科教育実践を対象としたものである。⑤⑥は北海道, ⑦は高知県の社会科諸プランを, ⑧⑨は和歌山県の吹上小学校と内原小学校のプラン及び実践を, ⑩は広島県の深安郡教育研究所と御野小学校の実践を, ⑪は広島県本郷町の地域教育計画を考察している。また, ⑫は昭和30年代の川崎市立田島中学校の「国連の研究」の実践を考察している。

これら①～⑫は社会科教育実践の歴史的研究を行ったものである。自ら発掘した貴重な資料の紹介を試みた研究が多い。しかし、社会科教育研究における実践史研究は、実践資料の単なる紹介にとどまらず、対象とした実践を構造的に分析し、理論的特質と歴史的限界性を明らかにすることが課題であろう。それなしでは、社会科教育実践の発展的創造はありえない。その点で、大正～昭和初期の時事問題学習の教育方法的側面の特質に迫った①、初期社会科カリキュラムの目標・内容・方法にわたる構造の解明を試みた⑦、児童の学習日記の分析から初期社会科の特質と限界性を考察した⑨が注目される。

⑬～⑰は特定の視点から社会科教育実践の分析を行ったものである。実践の創造と改善への指向性が強い研究である。学習活動における“体験”に着目して石橋勝治・今井蒼次郎「社会科の授業を創る会の実践及びデューイの経験思想を考察した」⑬、優れた実践と途次の実践の比較考察を行い科学的な社会認識育成の観点を具体的に明らかにした⑭、教育方法学の陶冶と訓育の観点からの授業分析を試みた⑮、子どもの教育的発達の観点から「今日一般的に見られる社会科」「1960年代教育科学研究会社会科部会」「社会科の授業を創る会」の実践を考察した⑯、社会認識と価値判断の諸関係を明らかにし意志決定能力育成の観点から実践の類型化を試みた⑰と、実践分析の視点は多様である。これらの中では、既成の社会科教育研究のパラダイムを超える立場からの実践分析を試みた⑯が注目される。

⑱⑲⑳は各国の社会科教育実践を視察された貴重な報告研究である。

2. 授業構成理論の分析

この分類に属する研究は、過去の社会科教育研究者（団体）の授業構成理論の紹介と分析を行ったものである。主なものとしては、⑲矢田宇紀「子どもの歴史的思考能力の育成」『社会科研究』第31号、⑳塚本智宏「ソビエト統一労働学校における「社会科」——歴史教育の展開（1920年～1927年）」北海道大学教育学部産業教育計画研究施設『産業と教育』第4号、1984、㉑大友秀明「現代西ドイツ基礎学校における「事実教授」」『筑波社会科研究』第3号、1984、㉒西谷稔「西独歴史教育における人物化の問題」『社会科研究』第31号、㉓岩永健司「歴史教授理論の諸構想」『社会科研究』第32号、㉔池野範男「西ドイツ歴史教授学のパラダイム変換」『広島大学教育学部紀要』第2部第32号、1984、㉕岩田一彦「景観地理思想における国際理解教育的特質」『兵庫教育大学紀要』第4巻、第2分冊、1984、㉖藤岡信勝「デューイ・スクールの「仕事」と「ものをつくる授業」社会科の授業を創る会『授業を創る』第10号臨時増刊、1983、㉗森脇健夫「デューイの歴史観・歴史理論と歴史教育」大阪教育大学社会科教育教室『社会科の授業研究』

第2号, 1985, ㉔増井宏明「アメリカ成立期社会科における「現代の諸問題コース」の内容構成」『社会科研究』第32号, ㉕木村博一・片上宗二「ヴァージニア・プランの分析的検討」『教育方法学研究』第10巻, 1984, ㉖栗原久「1960年代アメリカにおける経済教育改善運動について」『社会科教育研究』No.53, ㉗棚橋健治「社会科カリキュラム開発における“構造”概念について」『社会科研究』第31号, ㉘中村哲「子どもと社会(上)(下)」『秋田大学教育学部研究集録』第34~35集, 人文科学・社会科学, 1984~1985, ㉙森脇健夫「社会科学を社会科に導入する際の問題についての一考察」『東京大学教育学部紀要』第23巻, 1983, ㉚児玉康弘「探求の論理に基づく社会科教授方略」『社会科研究』第31号, ㉛荒木良子「社会科における概念教授」『社会科研究』第33号, ㉜佐藤年明「アメリカ社会科における教育目標としての「市民的資質」の検討(その1)」『社会科教育研究』No.50, ㉝森本直人「合衆国における市民的資質教育改革の方向性(1)」『島根大学教育学部紀要』第17巻, 教育科学, 1984, ㉞江口勇治「アメリカ合衆国における社会科論の展開(4)」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第8号, 1985, ㉟小原友行「小学校社会科における市民的資質育成の理論と授業構成」『高知大学教育学部研究報告』第1部第35号, 1983, ㊱今谷順重「T A B A社会科における価値の分析・感情の探究・個人間の問題解決の具体的展開」広島大学教科教育学会『教科教育学会紀要』第2号, 1983, ㊲同「知的自活者としての子どもを育む社会科実践」『社会科研究』第33号, ㊳鷓木毅「社会科における批判的思考の育成原理」『社会科研究』第32号, ㊴梅津正美「社会史に基づく歴史内容構成」『社会科研究』第33号, ㊵森本直人「社会科における「環境・資源」教育(I)」『島根大学教育学部紀要』第18巻, 教育科学, 1984, ㊶大森正・森茂岳雄「アメリカの社会科カリキュラムにおける文化多元主義の展開」『社会科教育研究』No.51, ㊷永井輝「明治20年代の歴史教授目的論」『社会科研究』第32号, ㊸溝上泰「社会科教育方法論の研究(その4~5)」『広島大学学校教育学部紀要』第1部第5~6巻, 1982~1983, ㊹大森正「及川平治の歴史教育論」『東洋大学文学部紀要』第38集, 教育学科・教職課程編, 1984, ㊺武元茂人「牧口常三郎の地理教育論(その1~2)」『三重大学教育学部紀要』第34~35巻, 教育科学, 1983~1984, ㊻岩田一彦「辻村太郎の景観地理学と思想的源泉」『社会科研究』第33号, ㊼奥本繁「公民教育の系譜(Ⅲ)」北海道教育大学史学会『史流』第26号, 1985, ㊽西内裕一「「柳田社会科」の目標と内容についての考察」『東京大学教育学部紀要』第24巻, 1984, ㊾白井嘉一「〈総合社会科〉論考」『社会科研究』第33号, ㊿伊東亮三・池野範男・吉川幸男「社会科授業理論の認識論的基礎づけ(I)・(II)・(III)」『日本教科教育学会誌』第8巻第1号, 1983, ㊿中村哲「社会科における授業研究(7)」秋田大学教育学部教育研究所『研究所報』第21

号, 1984, がある。

⑳はソビエトのザポロージェツの歴史的思考能力育成論を分析したものであり, ㉑はロシア革命後の1920年代に一時的に導入された社会科の変遷過程を歴史教育との関わりにおいて考察している。

㉒は西ドイツのバーデン・ビュルテンベルク邦の「事実教授」の試みを紹介したものである。他方, ㉓～㉕では, 西ドイツの歴史教育論が対象とされている。㉓ではベルクマンの所論を手がかりとして歴史教育における人物取扱い上の理論的諸問題が考察されている。㉔は1970年代以降に構想された歴史教授の諸理論を整理したものであり, ㉕はそのような歴史教授理論の新構想を歴史教授学のパラダイム変換ととらえ, 新旧の歴史教授学の特質を明らかにされている。また, ㉖はシュリューターの景観地理思想が国際理解教育論の前史として位置づくことを明らかにしようとしたものである。

㉗～㉙はアメリカのプラグマティックな社会科理論を対象としている。㉘は「ものを創る授業」と関連させながら, デューイのオキュペーションと歴史教育論の相関性を考察しており, それに対して, ㉙はデューイの歴史理論と歴史教育の相関性を検討している。㉚は社会科成立期の中等学校に設定された「現代の諸問題コース」の内容構成原理と実際を整理した文献の紹介を試みている。また, ㉛は日本の初期社会科の原典となったヴァージニア・プランの全体構成を再検討したものである。

㉜～㉞は1960年代以降のアメリカ新社会科, 新新社会科に関する研究である。㉜～㉝は科学的社会認識育成の教育論を対象としている。㉞は教育内容現代化運動にともなうアメリカ経済学会の教育活動の展開を概観している。㉟は社会科学探求の「構造」の視点から, ㊱は日本の社会科の意図的的行為的理解の原理に立つ学習方法論と対比させる形で, 科学的探求の原理に立つホルト社会科の特質を分析しているが, ㊲ではホルト社会科がなぜ教育現場に受け入れられなかったのかが関心事となっている。また, ㊳ではベイヤーの探求教授方略が詳細に考察され, ㊴では概念教授の諸方略の整理が試みられている。

他方, ㊵～㊷は市民的資質, 特に意志決定能力育成の教育論を対象としている。㊵が1960年代の市民的資質の概念を再整理したにとどまっているのに対して, ㊶㊷では1970年代後半以降の新しい市民的資質の概念が紹介されている。特に, コミュニティへの参加が市民的資質育成の原理として強調されている。㊸～㊺が原理レベルの考察であるのに対して, ㊻～㊽は授業構成論レベルまで論究されている。㊻ではマシャラス, カルトソーニス, バースの意志決定能力育成原理と授業構成論が, ㊼㊽ではタバ及びバンクスの概念探求学習を前提とした価値・感情・態度学習の原理と単元構成モデルが詳細に分

析されている。また、④は市民的資質の一側面である批判的思考を育成しようとする諸論を整理し、原理の抽出を試みたものである。

さらに、⑤～⑦は近年のアメリカの社会科理論の新動向を紹介したものである。⑤は社会史学習の内容構成論を、⑥は資源・エネルギー学習の諸論を紹介している。⑦は文化多元主義に立脚したバンクスの民族学習論と4つの州のカリキュラムを取り上げ、その意義と方法を明らかにしている。

以上の⑧～⑭は諸外国の社会科理論の分析を行ったものである。これらの研究は、わが国の授業実践への各理論の適用を意図したものと、社会科理論そのものの史的整理・検討を意図したものとに大別されよう。どちらの場合においても、単なる原理・理論の紹介にとどまらず、単元構成論・授業構成論のレベルまで具体化して、対象とした理論の特質と、それまでより一步以上進んだ理論の到達段階を把握することが要求される。その点で、前者の意図の場合は⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲が、後者の場合は⑳㉑が注目される。

㉒～㉙は日本の社会科理論を対象として分析を行っている。㉒は本荘多一郎の歴史教授目的論を、㉓は樋口勘次郎及び棚橋源太郎らの直観教授論を、㉔は及川平治の歴史教育論を、㉕は牧口常三郎の地理教育論を、㉖は辻村太郎の景観地理学を、㉗は公民教師用書を、㉘は柳田国男の社会科論を、各々分析している。これらの研究は対象とした理論の史的検討を意図したものとなっている。また、㉙は総合社会科と融合社会科及び統合社会科の概念整理を試みている。㉚㉛㉜は三氏の共同研究であり、今日の学校で多く行われている実践を「追体験し意味を理解する社会科」「子どもの思考を育てる社会科」「科学的認識と実践主体を育てる社会科」に分類し、各々の社会科授業論の基礎にある「ドイツ精神科学派の「理解」の認識論」「プラグマティズムの認識論」「マルクス主義の認識論」の立場から、各々の典型的な授業を分析し、授業理論の比較考察を行ったものである。㉝では現行の中学校社会科公民的分野の指導書が科学的社会認識育成の立場から批判検討されている。

3. 授業実践の創造

学会誌・紀要の誌上で授業実践の創造が試みられた主なものとしては、㉞原田智仁「『イギリス産業革命』の授業構成」『社会科研究』第32号、㉟河南一「中学校『鎌倉時代の文化』の授業構成」『社会科研究』第33号、㊱同「高校社会科の授業構成」広島大学教育学部学部附属共同研究体制『研究紀要』第11号、1983、㊲森分孝治、他「社会科学的概念学習の授業構成(Ⅳ)(Ⅴ)」広島大学教育学部学部附属共同研究体制『研究紀要』第12～13号、1984～1985、㊳今谷順重、他「人間として市民としての自立を促す社会科

の授業(Ⅰ)～(Ⅳ)』【神戸大学教育学部研究集録】第71～74集, 1983～1985, ⑤小西正雄:「現代社会」の探求法的単元構成』【社会科研究】第31号, ⑥山中升「社会科地理的学習における探究的ケース・スタディズ Case Studies の構想と具体化(その3～4)」【武庫川女子大学紀要】第30～31集, 文学部教育学科編, 1982～1983, がある。

⑥～⑨はアメリカ新社会科より学んだ科学的探求の論理にもとづいて作成された教授書である。具体的には, ⑥で「原始日本の発展」, ⑦で「東南アジア」と「鎌倉幕府の成立」の教授書が開発されている。他方, ⑧では科学的探求と価値探求の論理(④⑨参照)にもとづいて「産業の発達と公害(小5)」と「世界食糧危機と日本の農業(中2)」の学習指導計画が作成されている。これら⑥～⑧はアメリカの社会科理論を分析した成果として, わが国の実践への適用を図ったものであり, 意義が大きいと考えられる。また, ⑨では, 「現代社会」を総合学習と問題探求の学習の両側面からとらえたことにもとづく年間学習指導計画と単元構成案が詳述されており, ⑩では, 「日本の農業生産(小5)」の探究的ケース・スタディの詳細が報告されている。

授業実践の創造は毎日学校で行われており, その総計は星の数に匹敵する。ここに掲載した以外にも, 『教育科学社会科教育』『現代社会』『歴史地理教育』『教育』『生活教育』『考える子ども』『授業を創る』『ひと』等の雑誌に多くの実践報告がなされている。しかし, 明確な社会科授業構成論をふまえた授業実践は少ないように思われる。その意味で, 科学的社会認識及び市民的資質育成の論理をふまえた⑥～⑧の授業実践が広く波及することが望まれるが, その前提として, これらの授業実践の理論的有効性が客観的に実証されていく必要がある。

4. 授業構成理論の創造

社会科授業構成理論の新たな創造を目的とした主な研究としては, ⑪児玉修「社会科教育における意味認識の基礎構造」【宮崎大学教育学部紀要】第55号, 社会科学, 1984, ⑫木村浩司「歴史的説明と歴史教授」【社会科研究】第32号, ⑬山根栄次「小学校における経済的見方・考え方の指導(Ⅰ)」【熊本大学教育学部紀要】第33号, 人文科学, 1984, ⑭斎藤毅「『社会科地理教育』への自然地理教育の導入に関する一考察」【東京学芸大学紀要】第3部門第36巻, 1984, ⑮二谷貞夫「世界史におけるインド洋世界の設定」【筑波大学学校教育部紀要】第6巻, 1984, ⑯澁口俊「社会科授業成立の条件」【社会科研究】第32号, ⑰高山次嘉「今日の社会科教育の問題点と地域」【社会科教育研究】No.49, 1983, ⑱田中武雄「今日の社会科, 理論的・実践的課題をさぐる」【社会科教育研究】No.49, がある。

⑦は社会科授業における「行為の意味を認識する論理」を解明することを試み、⑧は被覆法則論者の科学的説明の論理にもとづいて歴史授業を改善する意義を、⑨は数量的経済概念の指導法を考察している。また、⑩は社会科への自然地理教育の導入を、⑪は世界史教育のインド洋世界を組み入れた再編成を提唱している。⑫～⑭は社会科の現状と問題点に対する提言を述べたものである。この種の論文は他にも数多いが、研究としての価値は疑問である。

5. 授業実践の実証

この分類に属するのは、授業実践の実態調査報告である。主なものとして、⑮宮崎和夫「『現代社会』の指導と評価の実態調査報告」『社会科研究』第32号、⑯魚住忠久「高校『現代社会』の展開とその課題」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』第7号、1983、がある。この種の研究では、調査項目の客観的設定が課題であろう。

6. 授業構成理論の実証

この分類に属する主な研究としては、⑰寺本峰雄「科学的証明の方法を組みこんだ授業構成」『社会科研究』第33号、⑱高山達雄・中村哲、他「Zeigarnik 効果を期待した中学校社会科の学習指導改善の試み(Ⅲ)」秋田大学教育学部教育研究所【研究所報】第21号、1984、⑲有馬毅一郎・森本直人・間田浩彬「社会科における『環境・資源』教育の実験的研究(I)」『鳥根大学教育学部紀要』第18巻、教育科学、1984、⑳高山芳治・杉原黎子「生活科学教育の実験・実証的研究(1)～(3)」『岡山大学教育学部研究集録』第63～65号、1983～1984、㉑高山芳治「『自己実現力』を育てる社会科授業書の開発(2)～(4)」『岡山大学教育学部研究集録』第66、68、70号、1984～1985、㉒次山信男・大沢克美「地域社会の協力的活動の認識に関する一考察」『社会科教育研究』No.53、がある。

⑰では演繹的、帰納的確率的、類推的の三種の仮説＝検証モデルを組みこんだ同じ題材の実験授業を実施し、前二者が仮説＝検証能力の育成に有効であると結論されている。⑱では前時に問題把握がなされ、授業外学習を経て行われる授業と、問題把握から始まる授業とを実施し、認識の深まりの観点から比較して前者の方が有効であると結論されている。⑲は資源エネルギー学習の3つの異なる授業を実施し、各々の有効性を論じたものであり、⑳㉑は「ひとり勉強」のための授業書を開発し、その実験授業の記録を分析している。また、㉒は学習前後の児童の認識の変化を、水道、ゴミ、震災の3つの単元を事例として考察している。

⑰～㉒の研究は⑰⑱と対比して教授学的に何が実証されたのか明確でなく、研究の有

効性は疑問である。また、実証の科学性の点では⑦⑧もさらに実験実証を継続する必要がある。

Ⅲ. 教科書研究の動向

社会科教科書の研究を試みた主なものとしては、③玉井正史「明治初期における「世界」認識の教育」【筑波社会科研究】第3号、④臼井嘉一「明治前期の「万国史」教育の論理」福島大学史学会【福大史学】第37号、1984、⑤上野実義「中国における高校用課本「世界歴史」にあらわれた日本歴史とのかかわりに就いて(Ⅱ)」【社会科研究】第32号、⑥魚住忠久「社会科教科書にみる国際理解教育(I)(Ⅱ)」【愛知教育大学研究報告】第32～33輯、教育科学編、1983～1984、⑦石井郁子、他「戦後日本の社会に関する授業研究」【大阪教育大学紀要】第31巻第2・3号、第V部門、1983、⑧藤沢法映「ヨーロッパの歴史教科書づくりにおける国際協力」【金沢大学教育学部教科教育研究】第21号、1985、⑨藤岡信勝「教科書研究の立場から」【教育】第438号、1984、⑩伊東亮三「社会科教科書論ノート」【歴史地理教育】第366～371号、1984、がある。

筆者の分類において、教科書の“実践の創造”(教科書づくり)にあたるのは、その所産としての教科書そのものである。教科書の検定制度を採用しているわが国では、ここ三年間、研究論文として教科書づくりに取り組んだ試みはない。③～⑧はいずれも教科書及び教科書づくりの分析を行っている。③④は各々、明治期の地理と歴史の教科書の内容構成を検討したものであり、⑤は日本と中国の世界史教科書における日本歴史についての記述を比較考察している。⑥⑦は各々、授業づくりの前提として、戦後改革と国連についての教科書記述を検討している。また、⑧は、ヨーロッパの歴史教科書づくりにおける国際協力の伝統、西ドイツ国際教科書研究所の歴史と現況、西ドイツとポーランドが結んだ歴史・地理教科書に対する勧告を紹介している。このように、社会科教科書研究は、概ね内容記述の検討(何が記述され、何が記述されていないのか)に終始している。

わが国においては、数多くの社会科教科書が作成されているが、教科書は社会科授業に使用できないとよく批判されている。これは、社会科教科書に教授学的な理論づけがなされていないためと考えられる。筆者の分類視点でいえば、教科書づくりの理論の創造が未開拓であるためである。社会科授業構成論と結合した形での教科書づくりの理論研究は早急の課題であるといえよう。その点で⑨の指摘は重要であり、各国の社会科教科書を教授学的に分析された⑩は示唆に富んでいる。

V. 評価研究、意識研究の動向

社会科評価研究は、ようやく活況を呈してきた観があるが、多くは著書、報告書として出版されており、最近三年間の学会誌及び紀要の論文としては、㉑棚橋健治「社会科における評価(I)」【広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集】第10巻、1984、があるのみである。

㉑は社会科授業構成論と結合した社会科評価理論の創造を試みている。従来の評価研究の成果であるR. R. 方式、ブルームらの目標分類研究及び形成的評価研究、到達度評価研究と、それらにもとづいて作成された評価事例は、社会認識に固有の体制を評価するものになっていないと批判している。そこで、社会科の知識の構造と知的操作の階層とを勘案して評価のマトリックスが作成され、各々の評価観点が示されている。

社会科教育における評価の重要性にもかかわらず、社会科固有の評価理論は開発されてこなかった。その意味で㉑の意義は大きい。理論の精緻化、各授業の評価案への具体化、理論の有効性の実証が今後の課題である。また、㉑にとどまらず、社会科授業の成果を適確に評価しうる理論を教授学的に創造し、テスト問題の作成等に具体化していくことが今後の課題であろう。

社会科教育研究における子どもの意識研究を行った主なものとしては、㉒有馬毅一郎「社会認識の形成に関する基礎的研究(Ⅱ)(Ⅲ)」【社会科研究】第31、33号、㉓石井郁子・吉野猛「学童の世界観形成の諸問題」【大阪教育大学紀要】第31巻第2・3号、第V部門、1983、㉔永井滋郎・松井政明「インドネシア高校生の社会意識に関する研究」【広島大学教育学部紀要】第2部第31号、1983、㉕寺本峰雄「児童期における社会認識形成過程の実証的研究」【社会科研究】第31号、がある。

㉒は戦前、戦後の心理学研究誌等の社会認識に関する研究を分類整理したものであり、㉓はソビエトの心理学の成果から幼児期・少年期の世界観形成のメカニズムを明らかにしようとされている。これらは社会科教育における意識調査研究の前段階のものとして位置づけられる。㉔㉕は実際に意識調査、意識発達調査を行ったものであり、授業への適用を意図されているが、㉕の場合、発達研究の様相が濃い。社会科教育研究における意識研究も、社会科授業構成論と教授学的に結合する形での、それ固有の理論の構築が課題である。

また、筆者の分類枠組に入らない研究として、㉖片上宗二「戦後教育改革と社会科の成立」【季刊教育法】第48号、1983、㉗同「社会科の創設と国史の存置」【講座日本教育史】第4巻、第一法規、1984、㉘ハリー・レイ「終戦直後の日本における「社会科」創設の背景」【社会科教育研究】No.52、1984、㉙同「民主教育をめざす公民科創設に払っ

た文部省とCIEの努力】『社会科教育研究』No.53, がある。いずれも、日本の社会科成立過程を明らかにされた貴重な研究である。

V. おわりに

1982年末～1985年の大学における社会科教育研究は、質量ともに、授業構成研究、中でも授業実践と授業構成理論の分析に集中している。分析的研究は創造的研究の礎となることが課題であるが、分析が不十分で、課題を達成しえていないものもみられる。創造的研究では、授業実践の創造に着実な進歩がみられるものの、授業構成理論の創造は提言レベルの研究が多く、ここ三年間停滞気味である。また、今日実施されている授業実践は、認識論から演繹され構築された理論仮説、及び諸外国の社会科授業構成理論に学んだ理論仮説にもとづいて行われている。それらの理論仮説の有効性を精緻に実証し、理論性を高めていくことも今後の重要課題である。

社会科の教科書研究、評価研究、意識研究は未開拓の段階にあるといてよい。どの分類の研究においても、社会科授業構成研究と結合した教授学的な理論研究を行っていくことが課題である。特に、授業で使える社会科教科書づくりの理論、授業の成果を適確に評価するための社会科評価の理論（テスト問題作成等の理論）の創造は早急の課題である。

社会科授業構成の研究がさらに進展し、それと教授学的に結びつく形で、教科書研究、評価研究、意識研究等が各々深められていくことが、今後の社会科教育研究の課題である。そして、これらの研究が相乗的に発展し、トータルなものとしての社会科教育の理論及び実践が創造されなければならない。

註) 本稿では、紙数の都合により、論文タイトルの副題は省略した。また、既出の雑誌の発行年も省略した。